「介護のしごとの道しるべ」によせて

（一財）高齢者住宅財団理事長
国際医療福祉大学大学院
医療福祉学分野教授
高橋紘士

「安心して老いるために」（1991）の制作にあたって羽田澄子さんは「もし特養が努力すれば、地域に対してどれだけのことが出来るか。」と問いかけておられた。サンビレッジが高齢者ケアニーズの展開に誠実に応え、事業が発展していったさまは法人30周年を記念して制作された「陽の里めぐり」（2010）で提示されている。施設経営で完結するのではなく居宅サービスの展開、地域づくり、そして、人材育成の拠点の設置など、地域に開かれた事業が社会福祉法人を核とした事業経営モデルとして開拓されてきた。まさに羽田さんの問いかけに誠実に応答してきた歩みであった。

介護は、人によるサービスの営みであるとしたら、介護の専門性の追求が事業の核であることはいうまでもない。介護人材を消耗品として扱う介護事業の跋扈（バッコ）のなか、サンビレッジでは介護の専門性にこだわってきたということが、今回の「介護のしごとの道しるべ」で明らかにされた。

ケアというものが「主体的モデル」と「客体化＝物象化モデル」に分かれるのではないかと最近考えるようになった。後者の典型は介護行為を分解し、それぞれの行為を達成することを目的とした「科学的介護」なるものである。そこでは人の個別性が捨象され、しばしば手段が自己目的化されていく、そこでは介護に関わる当事者の尊厳が軽んじられ、管理の対象として、いわば物象化されてしまう。

しかし、介護とは、虚弱となったといえどもその人らしい生活を主体的に追求するための支援の手法であるべきだ。地域生活を継続し、なんらかの事情でそれが困難だとしても、地域や家族との繋がりを継続し、人としての生活を再獲得するための支援こそ介護実践の目的である。そのための介護の専門性であるから、利用者中心の「アセスメント」が不可欠となり、そのための「チームケア」の核となるのが介護職である。

▶ケアコンテスト「介護場面を想定し支援の専門性を高める為のコンテストを開催」

「介護のしごとの道しるべ」は介護の専門性の追求が、新規開設の施設の歩みのなかで、どのように新人の介護職が成長していったかという自己形成のプロセスとともに語られている。

このDVDは「人間を取り戻す」尊厳をめざした介護の要諦を学ぶことのできる画期的な作品であり、見るたびに介護のあり方について、様々な発見がある映像がちりばめられている。